

目で漢方史料館 (320) 江戸の絶技、影写本と影刻本

解説 真柳 誠

写真もコピーもなかった時代、影写・影刻という高度な技術で貴重書が複製されていた。そうした原本を手にする、と、眼福のあまり心が躍る。途絶えた技の語呂合わせでもあるが、今回は江戸の絶技を紹介したい。

かつて『外台秘要方』巻三の江戸後期影写本を古書店で入手した。図1のように金沢文庫の印記や虫損、版心下部の刻工名まで忠実に影写した美本である。調べたところ、底本は南宋一二世紀前期の紹興年間版だった。原本は鎌倉期の金沢文庫にあり、江戸期は幕府の楓山文庫に秘蔵され、現在は宮内庁書陵部が所蔵する。それを楮斐交ぜ漉きの薄葉和紙に、写手が巧みに影写している。蔵印記も識語もないが、幕府医官か関係者の複製本だろう。

『外台』の同版別本はかなり現存し、静嘉堂文庫蔵書(上海・陸心源旧蔵)の『東洋医学善本叢書』影印本が図2である。料紙の黄変などで一部文字がつぶれているが、対比すると図1の精写ぶりがよくわかる。

いま内閣文庫にある図3も精緻な影写本だが、図1より筆致が硬く、虫損などの模写もない。多紀元堅らの嘉永六年(一八五三)跋によると、同二年に影刻した仿宋『千金方』と同様、これを出版するのが至願という。ならば元堅

らの影写本は影刻用の版下でもあった。跋文は楓山本が残りゆえ、紀州藩医員・武田純道家の同版完本(入明した武田昌慶の将来本)を巧手に二部影写させた、とも記す。

その一部は楓山文庫に納め、現内閣文庫に伝わる。医学館に納めた一部は明治初に来日した楊守敬が購入し、いま台北故宮に伝わる。故宮本もまったく瓜二つの精写だが、付録の攷異を欠く。守敬の題識は『経籍訪古志』と森立之の言を引き、嘉永二年(一八四九)に官命で武田本を医学館に郵致させ、五人が三年かけて影写したという。

しかし仿宋『外台』の出版は頓挫した。直後の安政元年(一八五四)、元堅らが半井本『医心方』を官命で郵致させ、この影写と校刻(一八六〇)に総力を費やし、明治を迎えたからである。半井原本(図4)は一九八四年、国宝に指定された。図5の医学館影刻本は書家の渡辺源三が大多数の版下を縮小影写したが、両者の酷似ぶりはどうだろう。ゆえに正確性も担保できる。幕末の絶技は医学館本『千金方』『医心方』等の基盤であり、ひいては漢字圏伝統医学の基盤ともなった。ぜひご記憶いただきたい。

(茨城大学)

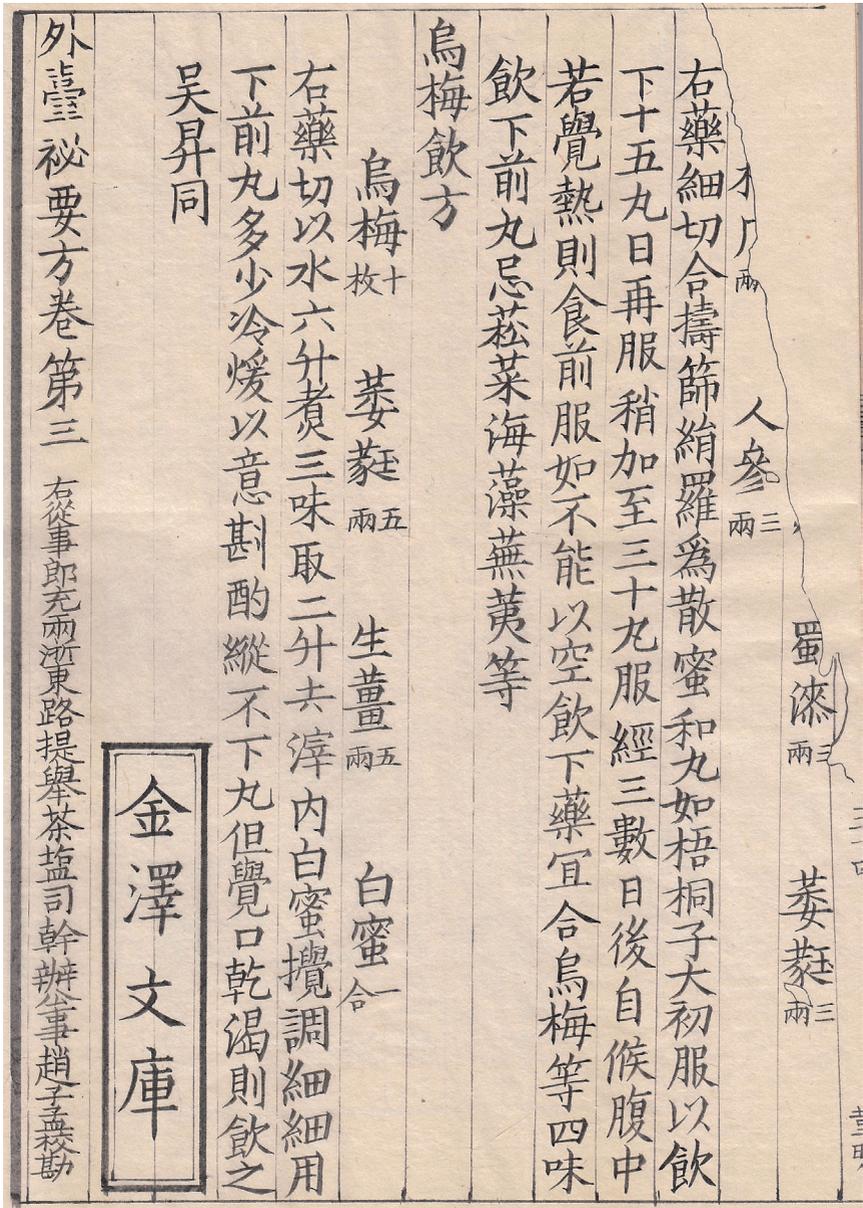


図1 宋版『外台秘要方』の江戸後期影写本



図3 宋版『外台』江戸医学館影写本

図2 宋版『外台』影印本

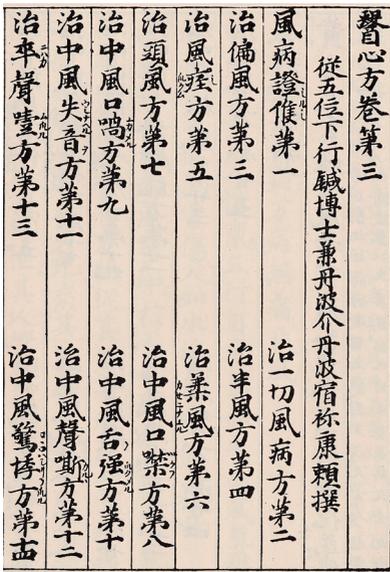


図5 『医心方』江戸医学館影刻本

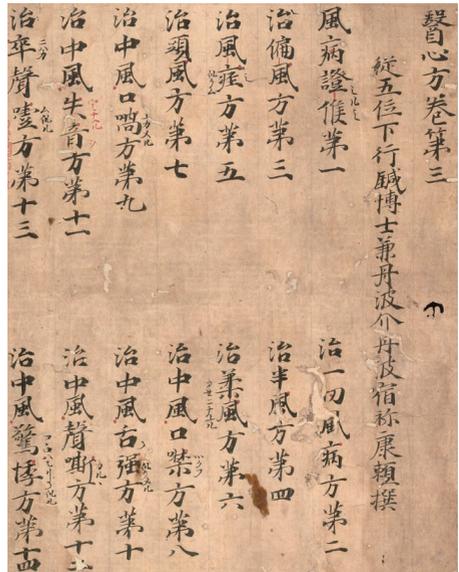


図4 国宝『医心方』半井本